

サラリーマンの私は、会社の福利厚生で毎年人間ドックを受けている。自宅に届いた診断結果を夫婦で見ているときに、「私も、一度くらいは人間ドック受けてみたいな」と妻から提案があった。

妻とは大学時代に会って、結婚して七年が経とうとしていた。幸いにも、これまで二人とも大きな病気はなかったが、なかなか子どもができないことが夫婦の悩みだった。不妊治療を始めて五年が過ぎたが、結果にはつながっていないかった。

自分だけ人間ドックを受けていることに後ろめたさも感じていたこともあって、妻の提案は快諾した。妻の受診する病院や検査内容を調べていると、女性特有の病気に特化したオプシオンがあることを知った。妻は妻で毎年婦人科検診を受けていたし、不妊治療を始める際にレディースクリニックで検査を受けていたこともあって、あまり心配はしていなかったが、せっかく人間ドックを受けるのであれば、女性向けのオプシオンも付けてみようということになった。

人間ドックの結果は、二週間後に自宅に送られてきた。診断結果の「ページ目には問題なし」の文字が続いていたが、「ページをめくるとある項目に目が留まった。そこには、「子宮内膜症の疑いあり」と書かれていた。信じられなかった。翌日、再検査を受けるため、近所の婦人科の病院に駆け込んだ。そこでもやはり診断結果は同じで、「子宮内膜症の可能性が極めて高い」ということだった。その病院では詳細の診断が難しいということ、大病院の紹介状を書いてもらうことになった。思っていたより、状況はよくないらしい。

大病院での検査でも、やはり子宮内膜症という診断だった。より詳しく検査してもらってわかったことは、卵巣にはチョコレート嚢胞があり、加えて子宮筋腫や子宮腺筋症も併発しているという、にわかには受け入れがたい事実だった。治療には手術以外の方法がないということで、半年後に手術の予定を組んでもらい、暗い気持ちのままこの日は帰宅した。

動揺を隠せなかった。これまでの婦人科検診やレディースクリニックでの検査ではなぜ見つけてもらえなかったのかという怒りもあった。ただそれ以上に、それらの結果に安心しきって、妻に人間ドックを受けさせる機会を作れていなかったことに、とても申し訳ない気持ちでいっぱいだった。改めて振り返るとここ数年、少しずつだが確実に、毎月の生理痛が辛いものになっていて、仕事に行けない日もあったほどだ。もつと早く検査を受けていけば…、セカンドピニオン

を考えていけば…。そんな後悔する気持ちで頭がいっぱいになった。でも、落ち込んでばかりいても前には進めない。妻は言葉にはしなかったが、私以上にショックだっただろうし、精神的にも辛いはずだ。手術まで、私が妻を支えよう、サポートしようと思決した。

六ヶ月はあつという間に過ぎ、手術の当日を迎えた。子宮内膜症の手術は、開腹ではなく腹腔鏡での処置ということだった。お腹に傷が残りにくいということで、少し安心した。内視鏡を見ながらお腹の中の内膜を取り除いたり、癒着を剥がしたりする手術になるとのことだった。当初の想定より難しい手術で、四時間もの時間がかかった。子宮腺筋症などの一部は取り除けなかったが、手術は無事成功した。

子宮腺筋症の治療が終わり、術後の経過も良好だった。手術をしてくれた大病院から、不妊治療再開の許可が出た。また、大病院での不妊治療を勧められてくれ、手術から二ヶ月後には不妊治療をスタートさせることができた。そして、不妊治療再開から約一年経過したところに、妻が赤ちゃんを妊娠した！子宮内膜症は不妊の原因とも言われている。人間ドックで病気を発見でき、治療ができたことで赤ちゃんを授かることができた。そして、今年の一月に待望の第一子が誕生した。自分の人生の中で、こんなに幸せなことはない。その記念と、妻との闘病の記録として、この手記の筆を取った。

この手記を読んでくれた人にぜひお願いしたいことがある。自分の大切な人がまだ一度も人間ドックを受けたことがないのであれば、ぜひ検査を勧めしてほしい。私たち夫婦のように、日々の健康を過信しないでほしい。リスクはどこに潜んでいるかわからない。受け入れ難い辛い現実がそこにはあるかもしれない。ただ、見て見ぬ振りをしていても何も変わらない。むしろ自体は悪くなっているかもしれない。病気がわかれば向き合い方も考えていける。人生の主導権を、自分たちの手に取り戻すことができる。人間万事塞翁が馬だ。治療の先には新しい未来が待っている。